

パラダイムシフト

—2100年への思考実験—

第5部 変貌する学と美 ③

寄稿

管啓次郎 (詩人、明治大教授)

歴史を喚起する詩の冒険へ



詩の目的を訊かれるたび、こ
う答えてきた。詩は何かを思い
出させる、人の気分を養える。
言葉の連なりが読む者の心に連
想の風を生み、情動をかき乱す。

生きるための力を与える。それ
は詩に限らず、あらゆる芸術と
学知のもっとも基本的な作用だ
ろう。

とここで心とは、人が生存の
ために作り出す装置だ。そして
心は、あくまでも社会とその歴
史によって枠組みを与えられて
いる。先日、美術家・岡部昌生
さんとともに北海道の旧炭鉱地
帯を訪ねる機会があったのだが
が、詩がめざすものについて示
唆されるところが非常に大きか
った。それを記してみた。

の表面を唯一の手がかりとして
記憶を呼びさまそうとする努力
が、大きな意味を帯びてくる。
自然力と人間世界の界面で起き
た事件、そこを流れていった集
団的な心。過去と現在のあいだ
に一枚の紙をさしはさむこと
により、見えてくることがある。
この美術家の仕事に、ぼくは詩
の創作との同型性を、強く感じ
る。

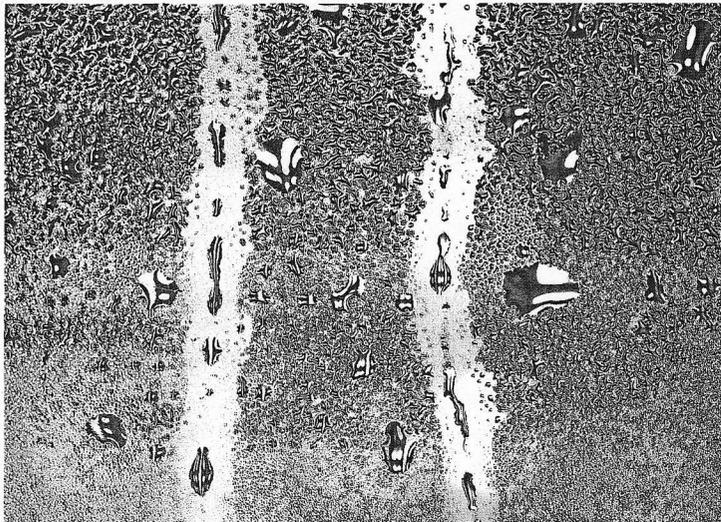
札幌で岡部さんたちと「近代」
をめぐる話をした翌日、三笠市
奔別にある炭鉱跡を案内しても
らった。少年の目が見た炭鉱の
生活世界をよく教えてくれる好
著『明るい炭鉱』(創元社)の
著者・吉岡宏高さんのお話を聞
きながら改めて思ったのは、あ
るひとつの産業の時代は意外に
短いということだ。「近代」は
まさに石炭をエネルギーとして
離陸した時代だった。化石燃料
の大量消費は今も続く。だが時
代とは重層的に流れるもので、
成長や拡大を原理として進んで
きた近代は、すでに破綻してい
る。岡部さんが擦り取りの対象
として選んできたのは、広島に
しても福島にしても北海道にし
ても、まさに近代の破局が露出
した地点ばかりだ。

青空にそびえるそれには恐ろし
いほどの喚起力があつた。過去
を思い出せと呼びかけてくるの
だ。それを見ながらぼくは、詩
の新しい視野が開けてきたよう
に思った。一言でいうと産業を
問題化する詩。通常の歴史記述
には浮上しない歴史を思い出さ
せる詩だ。その見事な例として、
新井高子の『ベットと織機』(未
知谷)をあげようか。群馬・桐
生の織機工場をモチーフとし
て、終わった産業の、忘れられ
た娘たちの声がつむがれる。あ
るいは原発以後を幻視しつつ今
そこに実在する原発を奇烈に批
判する、和泉晃一の『廃炉詩篇』
(思潮社)。昨年出版されたこ
の二冊の詩集は、いずれも産業
を対象化した近代という枠を見す
える想像力の冒険に、一步を踏
み出そうとしている。

もちろん詩の言葉は、歴史を
明言的に提示するわけではな
い。技術に、経済に、自然力に
翻弄されながら、共同体の経験
と心のありようを別の時、別の
場所の人々に思い出させようと
するのだ。詩の目的は、と改め
て訊かれるならば、今はこう答
えたい。詩は歴史を思い出させ
社会を変えたいと願う、そのた
めに産業とライフスタイルを問
題とする。そんな動きが、これ
からいよいよはっきりに見えてく
るだろう。



伊藤 玄二郎 (エッセイスト)



尾籠 豊 撮影

岡部さんの手法はフロッター
ジュ。対象物の表面に紙をあて、
その凹凸を鉛筆やクレヨンで
「擦り取る」。擦り取る表面は、
たとえば広島島の爆心地、福島
の炭鉱の遺構など。類例がない
孤高の芸術家だ。表面は、その
場所のできたすべての出来事の
痕跡を留めている。手の激しい
往還によってそうした痕跡を転
写することは、それ自体が言葉
を使わない、別のかたちの歴史
記述なのだといいたい。

実際、ある場所に立っても、
われわれは何も知らないのだ。
社会はすべてを忘却する。覚え
ていないのは一部の当事者、目撃
者だけ。だが忘れてはいけない
こと、思い出さなくてはならな
いことがある。そのとき、場所

奔別には地下千近い深さの
立て坑にゲージを降ろしてゆ
ための橋が残っていて、秋の

最後に訪ねたのが
にある里見淳先生の
の玄関で秘書に名
帰ろうとしたその時
「よかったら、お
いな」
奥の方で張りのあ
た。声の主が里見淳
は明らかだった。
本音を言えばその
りたかった。実は作
読んでいなかった。
の挨拶が済むと、
出した名刺を座車か
倉彫の文箱に移した。
「もう少しで晩め
がなければ一緒に

都美ウツワ・(三学
東京ダウエ
21)。(トリエ
持「パン」よ
知